Title	「あなたは誰の足を洗うのか」：苦難のただ中でリーダーを起こす
Author(s)	George, Kalantzis 柳田，洋夫・訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11：147-156
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5312
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第三回東日本大震災国際神学シンポジウム】

主題講演（第二日目　二月一七日）

「あなたは誰の足を洗うのか」――苦難のただ中でリーダーを起こす

ジョージ・カランティス
柳田 洋夫・訳

しかし、孤住生活には危険がある。……第一の、そして重大な危険は自己満足である。

（カイサリアのバシレイオス（三三〇頃―三七九年）*Longer Responses* 7.3.26）

孤立的な霊的生活や教会の孤立の危険について述べられたものの中で、私は、四世紀後半のカッパドキアのカイサリアの司教であるバシレイオスの言葉以上に適切なものを他のどこにも見出すことができません。

私は歴史神学者です。ですから、ただ現在を見て、自分が今日において何であるのかを理論化するだけでなく、常に過去と関わりを持つことによって、世界は私にとって意味のあるものとなります。先人たちとの交わりの中で私は思考するし、現在というものが私にとって意味を持つのはひとえに、過去において神を信じていた人々の語りの深みにある、はるかに長い物語の一部としてなのです。キリスト者として、私たちは神の物語の民なのだと告白します。

そこで、大災害と苦難のただ中における教会の役割を考えるために、また、私たちの隣人たちと共に、そして隣人に

寄り添って働きをなす可能性を思い描くために、もしくは、未来のためにキリスト者のリーダーを起こすことが何を意味するかということについて共に考えるために私たちは集まっているのですから、私は一つの物語を語りたいと思います。それは、初代教会に由来する多くの物語の一つであり、歴史を通してキリスト者に多大な影響を与えた物語である、カッパドキア（現在のトルコ）のカイサリアの司教バシレイオスの四世紀半ばの物語です。

三六九年の飢饉とバシレイオスの応答

ローマ帝国の国境にある属州に位置する重要な都市の司教として、バシレイオスは、カッパドキア地方の大都市における豊かさにも貧しさにも通じていました。四世紀は転換の時期でした。そしてキリスト教は、ほとんど二世代のうちにローマ帝国の人々の意識の中に素早く浸透したにもかかわらず、四世紀の半ばまで、キリスト者はかなり大きなマイノリティーにすぎませんでした。さまざまな恩恵の中で、コンスタンティヌスが皇帝となった四世紀の初め以来キリスト者が享受した宗教の自由によって、多くの男女が、カッパドキア地方の辺境まで広がった修道院の共同体におけるキリスト教の敬虔に生きる選択をなすに至りました。

修道士の中には、自分たちは他のキリスト者たちよりも優れていると考えて、自らを教会の他の人々と区別する者もいました。また、より敬虔な者もいました。騒音や、町や村の霊的な汚染から離れて、霊的達成、祈りの生活、黙想などを追求したキリスト者たちです。彼らはみな、孤住生活の中で神との人格的関係を探し求めていました。

このような孤住生活は、霊性や適切な隠遁生活を修道的に追求することに際して大変助けになったのですが、バシレイオスは、そのような孤立的生活を鋭く批判するようになりました。それは、ひどく個人主義的で、キリスト教のメッ

セージを歪めているというのです。修道院生活についての最も著名で重要な著述である彼の『修道士大規定』（*Long Rule*）において、バシレイオスは、キリスト教的生と実践を聖書に根拠づけ、キリストの模範に基づく一貫した霊性について語りました。バシレイオスは、孤立的生活が内向きになり自己満足に陥る危険を警告し、修道士たちには、この世において神の手足となるよう訴えました。彼は修道士たちに、精一杯信仰に生きることを望みました。兄弟姉妹たちへの彼の訴えは大変素晴らしいので、引用が長くなることをお許しいただきたいと思います。

孤住生活には、すでに述べてきたことに加えてさらなる危険がある。第一の、そして最大の危険は自己満足である。というのは、もし、ある者が、その行動を吟味する者をひとりも持たないとしたら、命令の完全な成就をすでに達成したと考えてしまうだろうからである。そして、その行いが試されることも決してないゆえに、自らの欠けに気づくことも、なしえたかもしれない進歩に気づくこともないだろう。まさに、命令を成し遂げるあらゆる機会を彼は奪われているゆえにそうなのである。

もし、自らの謙遜を示す相手がいなかったとしたら、彼はいかにして謙遜の美徳を実践することができるだろうか。もし、他の人々との交際から切り離されているなら、彼はいかにして同情心を示すことができるのか。また、彼の意向に反対する者がいないとしたら、どのようにして忍耐心を示すのであろうか。しかし、正しい行為のためには聖書の教えだけで十分だという者がいるならば、そのような者は、機織りの技術を学んだのに何も織らない者に似ている。もしくは鍛冶の技術を教わったのに、学んだことを決して実践に移そうとしない者に似ている。そのような者に対して使徒はこう言うだろう。「律法を聞く者が神の前で正しいのではなく、これを実行する者が、義とされる」（ローマ二・一三）。主ご自身が、その卓越したやさし

さゆえに、言葉や教えで満足されず、その愛の完全さにおいて謙遜の模範を私たちにはっきりと示されたことを私たちは知っているではないか。実際に、主は、腰に帯を巻き、弟子たちの足を洗われたのである（ヨハネ一三・四―五）。あなたは誰の足を洗うのか。誰に仕えようというのか。もし一人で暮らしているのなら、あなたはいったい誰の中でもっとも低い者となろうというのだろうか。また、聖霊が、大祭司の頭から香りを放つ貴重な香油になぞらえた、兄弟たちが共に住まうという（詩編一三三・一―二）善き喜ばしいことが、孤住生活においてどうして成し遂げられるだろうか。

かくして、兄弟たちが共に住まうということ（詩編一三三・一）は、競技者たちの競技の場であり、進歩のための高貴な道であり、たえざる鍛錬であり、主の命令についてたえず黙想するということである。そして、その目的は、「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」（マタイ五・一六）と言われた私たちの主イエス・キリストの命令に従い神の栄光を誉め称えることにある。[1]

バシレイオスは単なる理論家ではありませんでした。聖職者であり牧会者であり、司教の職務にありました。バシレイオスは、キリスト者として、私たちは神の被造物としての本性により隣人を愛するのだと言いました。[2] そのような愛は自然のことなのです。バシレイオスは、善や、愛や、貧しい人々や除け者にされた人々と一体となることなど、他の人々が熱望し、また成し遂げもするようなことは、キリスト者にとって本質的要素であることを理解していました。バシレイオスは、隣人愛を、単なるキリスト教的生を成就するための挑戦であるとは考えませんでした。彼は、マタイによる福音書第二二章三七―三九節において、イエスが若き律法学者に何を言われたのかをよく理解していました。「先

生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」。イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」[3]。これら二つの福音的命令は、旧約聖書のモーセの律法に由来するものです。これら二つを言われたのは同じ主です。しかし、第二の命令は、第一の命令に続くだけでなく、完成するものでもあるということをバシレイオスは気づかせてくれます。隣人愛を強調することにおいて、バシレイオスは暗にキリスト教的生を共同体の文脈に含み入れます[4]。孤立的生活はキリスト教とは無縁であるし、神学的に矛盾しているのです。ヨハネによる福音書第一三章三五節「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」には、真の弟子のしるしとしての愛が示されています。第一の命令を守ることにおいて、私たちは第二の命令を守るのであり、その逆もまたしかりなのです。

兄弟姉妹たちへのバシレイオスの訴えは、三六九年の冬に最も厳しく試されました。それはカッパドキアを壊滅させた大地震の後であり、ほとんど四年にわたってこの地域に飢饉が広がりました。何千人もの人々が亡くなりました。そしてそれ以上の人々が住む場所を追われ、病気になり、希望を失いました。その大災害のただ中で、バシレイオスは、行政者としての優れた技能と手腕を生かして、彼の権限によって町を変革しました。正統教会だけが彼の関心ではなかったのです。欠乏、病気、疾患、貧困という苦しい状況が広がっていました。バシレイオスは、貧困と欠乏の中にある人々へのケアを推進しました。「バシレイアドス（Basileiados）」と呼ばれる、病人へのケアと、食糧の分配のための一連の施設がそのことを証ししています。彼は貧しい人々のために病院を建て、キリスト教の巡礼者のためのホスピスや、町全体に慈善活動を広げるための、一連の都市修道院と呼ばれるものを設けました。飢饉後のカッパドキアにおける大規模な救援活動の原動力となったのは、バシレイオスとその修道士だったのです。

バシレイオスの生前を偲ぶ葬儀説教において、彼の友人であり同僚であるナジアンゾスのグレゴリオスは、彼がいか

にして「孤住生活と共住生活とを一つにしたか」について私たちに語っています。バシレイオスは、修道士のための個室を造るのですが、それは互いにつながっていて周囲の共同体と近接しています。そのことによって「黙想する魂が社会から隔離されない」ようにし、「神の栄光のために共に働く」ことができるようになります[5]。ナジアンゾスのグレゴリオスは、友人バシレイオスを、エジプトの飢饉と彼の家族の双方を救援したヨセフ（創世記四一章以下）になぞらえます。「バシレイオスは、飢えに苦しむ人々を一つの場所に集めた。やや立ち直りつつある人々も、男性も女性も、子どもも老人も、嘆きの中にあるあらゆる年代の人々をも含めてそうしたのである。彼は寄付金によって、飢饉を救うのに助けになるあらゆる食糧を集めた。そして、エンドウ豆のスープの大釜と、貧しい人々の栄養になるように塩漬けの肉を準備して彼らの前に置いた。そして、ためらうことなく弟子たちの足を洗い、仲間の僕と同労者たちをもまたそのようにさせたキリストの業に倣って、尊敬のしるしと必要な回復手段とを結びつけ、バシレイオスは飢え渇く人々の体と魂のために奉仕した。そのようにして、彼らに心と体の二通りにおける援助を提供したのである[6]」。

バシレイオスは、貧しい人々へのケアによって祈りの生活が活気づけられるような共同体的実践を演出することにおいて修道士たちを指導しました。バシレイオスは、「キリスト者における社会的責任の感覚を育てる実践的宗教」に大変関心を持っていました[7]。バシレイオスは、寛容の欠如が主要な罪であると主張しました。キリスト教的な回心や、生や、完成などについての主要な目に見えるしるしは、単に精神的にではなく、経済的なところまでも深く社会に影響を与えると信じていました。彼の「バシレイアドス」は間もなく、彼が「キリストの体制」（Christ's polity）[8]と呼んでいたものを具体的に示すものとなりました。それは「敬虔の宝庫……そこでは、病は平静さによって耐え抜かれ、災厄も祝福となり、共感の情の真価が問われる[9]」という新しい町なのです。

苦難を通して、障壁を越えてリーダーを起こす――いくつかの控えめな提案

バシレイオスは、神学者スタンレー・ハワーワスが現代においてしばしば繰り返してきた、「教会が社会倫理を持っているのではなく、教会が社会倫理である」ということを、はるか昔に知っていました。教会は、キリスト教的生活様式や、道徳や、また霊性がどれほど優れているかを示そうとして競い合う、美徳や社会倫理の思想の雑然とした市場に増し加えられるプレーヤーではありません。教会は、この世の競争の流儀の中にあるのではありませんし、神がそのようにしろと教会に言われているのでもありません。そうではなくて、教会は、キリストにおいてもたらされた新しい生き方の発現なのです。バシレイオスは修道士たちに、キリスト教的霊性の*culmen perfectionis*（最高度の完成）は、*culmen charitatis*、つまり慈善の実践の極みに他ならないと教えました。そのことからは誰も、修道士でさえも免除はされないのです。

神とはどのようなお方であるのかをこの世が知りうる唯一の方法は、神と関わりがあるという人々、神によって生まれ変わったという人々を見ることです。そして、私たちの中に映し出されている神ご自身の姿を見ることです。ピーター・ライサートが主張したように、「福音の、第一のそして主要な擁護、またはパウロにではなくキリストに宛てる最初の『称賛の手紙』は、議論などではなく、聖霊によって、奉仕と苦しみにおいてキリストに一致した教会的生き方である。その共なる生き方がキリストに似る罪人の共同体、それが教会の第一の弁証である。そして、そのような都市が存在すること自体が私たちの主たる『主張』なのである」[10]。もしくは、ジェームズ・K・A・スミスが「教会が弁証論を持っているのではない。教会そのものが弁証論である」[11]と述べる通りです。「神は存在するのか」とこの世が問う

たとき、神の最初のそして唯一の応答は、「私の民を見よ、私の名を呼べ」（イザヤ四二・一〇―四三・二八その他参照）ということです。かつてのイスラエルのように、教会こそが、神とはどのような方であるかについての、希望とは何かについての、また、恐れにとらわれない生き方とはどのようなものなのかについての神の宣言なのです。

キリスト者にとって、愛とやさしさ、慈愛と正義の行為は、あってもなくてもよいようなものではありません。それらは私たちの遺伝の表現型です。現在、教会は、「隣人を愛す」（マルコ一二・二一、マタイ二二・三九）ことは少数の者たちの個人的で特殊な性癖などではなく、主の命令なのだということを理解するリーダーを必要としています。

救いは人格的なものであるにしても、決して個人的なものではないことを理解するリーダーを教会は現在必要としています。バシレイオスとその都市の物語が私たちに教えるのは、楽観主義の名残を捨てて希望に生きるとはどういうことかをこの世に向けて明らかにするよう教会に促すことを厭わないリーダーをキリスト者は常に求めているということです。

四世紀の時代と同様に私たちもまた、まさに「その人たちはお返しができない」［ルカ一四・一四］ゆえに、豊かさと恵みが過剰に溢れかえるような潤沢なマナの経済において生きることは何を意味するかということを教会に示すリーダーを必要としています。この世を支配する経済のただ中で、恐れと欠乏と不安の経済が、また、自己保存と自己利益という、頭がおかしくなりそうなまでの虚しさが、キリストの招きにとって代わられます。キリストは、自らを与えてくださったことにおいて、私たちが自らを、共に働く者たちととらえるように招いておられるのです。

大災害と圧倒的な欠乏の時においてさえも、バシレイオスは、この世に対するキリスト教の務めは、単に holistic ではなく、まったく wholistic なものであることを知っていました。holistic な務めとは、システムにおいて、私たちの注意を要する holes［穴］や不足を見つけ、それへの取り組みを考えるというほどのことです。しかし、キリスト者は、自分たちは一体とされた（whole）民であり、一方、生と霊と心と体の一体性（wholeness）を欠く者たちであること

を知っています。初期の教会の宗教的状況を支配したギリシア的またグノーシス的哲学者の多くや、この世やこの身の苦しみからの解脱を説いた人々とは違って、福音の喜ばしい知らせは、神がこの世を贖われ、すべてを新しくされるという驚くべきメッセージに根ざしていました。「見よ、わたしは万物を新しくする」（黙示録二一・五）。

ハワーワスには、もう一つのよく知られた言葉がありますが、それをもって締めくくりたいと思います。最終的には「私たちの主張の真実性は、その主張がどのような共同体を産み出すかによって判断される」のです。

注

＊訳者の補語は［　］に入れて示した。

（1）Basil, *Reg. Fus.* 7: 34–36.［バシレイオス「修道士大規定」（桑原直己訳）、『中世思想原典集成』2、平凡社、一九九二年所収、二〇六―二〇七頁参照］。校訂版はAnna Silvas, *The Asketikon of St Basil the Great*. Oxford early Christian studies. Oxford: Oxford University Press, 2005 所収。ここでは、E. F. Morison 訳 *St. Basil and His Rule: A Study in Early Monasticism* (London: H. Frowde, 1912), pp. 43–44 を用いている。この翻訳は、バシレイオスの情熱的な訴えをいっそう豊かな言葉で伝えているように見受けられるからである。

（2）Anthony Meredith S. J., *The Cappadocians* (London: Geoffrey Chapman, 1995), p.29.

（3）マタイ22: 36–39.

（4）Dermot Tredget, OSM, “Basil of Caesarea and His Influence on Monastic Mission” (2005, http://www.benedictines.org.uk/theology/2005/tradget.pdf)

(5) Gregory of Nazianzus, *Oration* 43.62 (SC 384:260; trans. NPNF 7: 415–416).

(6) Gregory of Nazianzen, *Oration* 43.35. In Leo P. McCauley, *et. al. The Fathers of the Church, vol 22: St. Gregory Nazianzen and Saint Ambrose: Funeral Orations* (Washongton, DC: The Catholic University of America Press, 1953), p.57–58.

(7) Philip Rousseau, *Basil of Caesarea* (Los Angeles, CA: University of California Press, 1994), p.136.

(8) GNaz, *Oration* 43.63.

(9) GNaz, *Oration* 43.63.

(10) Peter J. Leithart, *Against Christianity* (Moscow, ID: Canon, 2003), pp.99–100.

(11) James K. A. Smith, *Whose Afraid of Postmodernism* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2006), p.29.